

「神戸発 わが家の防災学習 —ジュニアチームが拓く学びのネットワーク—

神戸防災楽習連携促進協議会（神戸市）

ねらい・目的

近い将来、甚大な被害をもたらすおそれがあるといわれている東南海地震の発生が予測される中、住民による地域防災力の強化は急務である。今日、各地でさまざまな防災活動が行われているが、単一な訓練内容や参加者の減少などにより、活動の継続性や広がりには課題がある。

そこで、本実践では、1995年に発生した阪神・淡路大震災により得られた経験と教訓を持つ神戸の人々が、他の地域の防災学習者に対して、インターネットを介した多様な防災活動を学べるサイトを立ち上げることにより、地域防災力の向上を目指すと共に、地域コミュニティの活性化を図ることを目的としている。また、震災の記憶と備えを風化させず、後世に伝えることも目的としている（写真）。

内容

神戸の地域防災活動の単位である「防災福祉コミュニティ」の活動が盛んな「ひよどり台防災福祉コミュニティ（神戸市北区ひよどり台団地）」では、住民が中心となって、地域防災活動の月例会のカリキュラムをコンテンツ化してインターネ

ットに掲載している。

(1) 「神戸発 わが家の防災学習」

小中学生約140人から構成される「防災ジュニアチーム」の月例防災学習会活動をインターネットで教材化した「神戸発 わが家の防災学習」を立ち上げている。主な内容として、「命を守る10のポイント」「防災基礎知識」「覚えておきたい救急措置」「覚えておきたいロープワーク」「災害図上訓練」「AEDを使った心肺蘇生法」「防災クイズ」などがあり、ジュニアチームが一部コンテンツを作成・提供したり、訓練の実演モデルをしている。ホームページ作成にあたり、地域住民、消防署員、教育関係者有志などから構成される「神戸防災楽習連携促進協議会」を立ち上げ、随時更新している。

(2) デジタル版防災福祉コミュニティマップ（資料1・2）

地域住民に対して、近隣の避難所や地域防災関連施設などを掲載した、「デジタル版防災福祉コミュニティマップ」を作成し、ホームページからPDFファイルでダウンロードできる。このマップは、地域の防災拠点を知ると共に、災害弱者への情報提供となるだけでなく、災害図上訓練用の資料にもなる。また、いまだに地域防災活動に参加していない住民に対しても、平常時から地域防災に関心を持ち、参加を促す広報媒体にもなる。



写真・市民（消防署員）が防災知識を伝える

資料1・「デジタル版防災福祉コミュニティマップ」ツール説明—マップは印刷・配布することでインターネットを持たない高齢者や情報弱者にも配慮されている。



(3) 「神戸と学ぶ防災市民塾」

「神戸発 わが家の防災学習」のホームページの作成を契機として、地域の人々だけでなく他の地域の住民に対しても、地域防災活動を実践する際の指針として発展的に作成したのが、「神戸と学ぶ防災市民塾」である。

具体的には、「神戸防災楽習連携促進協議会」のメンバー各々が持つ防災に関する知見を、富山の防災学習グループがインターネット市民塾を通じて学んでいる。主な内容は、「地域防災活動の役割は誰?」「みんなが参加できる地域防災活動のヒント」「自分と家族の命の守り方」「楽しみながら学ぶ地域防災マップの作成と活用」「森と防災」などがある。地域を超えた学習コミュニティ間の学びであり、経験の少ない富山の学習グループにとって防災コミュニティ運営ノウハウは大きなヒントとなっている。

インターネットを通じた学習交流だけでなく、毎年1月17日の阪神・淡路大震災の日には神戸でのスクーリングを開催し、協議会メンバーが受講者に対して、直接経験と教訓を伝える活動も行っている。災害の危険は地域によってさまざまであり、今後このような地域を超えた実践グループの学び合いにより、防災活動の「実践知」が蓄積され全国で共有することが期待できる(次頁資料3)。

実践結果 (今後の課題)

(1) 地域住民の防災活動への参加を促進できる

これまで地域防災活動に参加していなかった住民も、本ホームページで活動を見ることにより、

参加する動機付けを行うことができた。特にジュニアチームの保護者や、中年男性の新たな参加者があった。また、月例会の活動をコンテンツ化することにより、訓練に参加できなかった住民や反復学習したい参加者が、ホームページを見て学習できると好評である。

(2) 活動のコツ等について、掲示板やスクーリングで直接指導を受けられる

ホームページでの事例紹介を参考に、水消火器を使った消火訓練を開始した富山の地域防災組織もあるなど、地域防災活動を多くの住民が興味を持って参加できるカリキュラムについて具体的な指導を受けられると共に、受講者同士の情報交換にもなる等、受講者から好評を得ている。

(3) デジタル版防災福祉マップの有用性

デジタルマップは印刷広報物と異なり、適宜情報を更新できる。例えば、災害伝言ダイヤル(171)等で最近その存在が見直されている災害時に有用な公衆電話など、街の変化について随時コンテンツに追加できる。また、限られた予算で活動しなければならない地域防災活動団体の広報費を、最小限かつ最新の情報を提供できる点でも有用である。

(4) 住民間の情報格差の解消

災害時に情報弱者となる高齢者等に対して、デジタル版防災福祉マップの印刷・配布により、地域防災に関する住民間の情報格差を縮小できる。

(5) 今後の課題

継続的に月例会(毎月第2土曜日)を開催し活動をコンテンツ化する体制を、継続的にかつ発展的に蓄積していくための工夫が必要である。活動

資料2・「神戸市立上野中学校のデジタル防災マップづくり」 社会科の授業を通じてデジタル防災マップを作成し地域に発信しようとする活動。協議会は学校主体の活動をバックアップし、防災福祉コミュニティ、消防団、地域の防災防犯関連機関の協力も得て実施。担当教員によると、生徒は防災についての知識とともに協調性が高まったという。



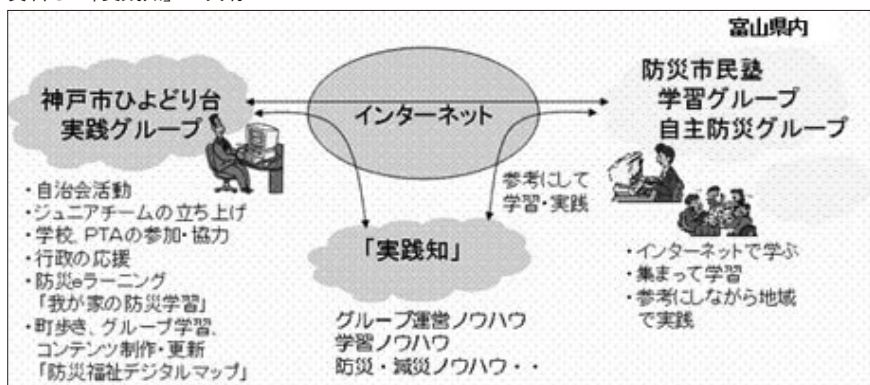
紙マップとデジタルカメラを持ってフィールドワーク



班の代表がコンピュータ教室でデジタルマップへ入力



地域住民を学校へ招待して完成したデジタルマップを公表



継続の鍵として、ジュニアチームやそのOBなど、若い世代が活動しやすい環境づくりをしている。具体的には、防災市民塾やデジタルマップのコンテンツ作成を担当してもらっている。中でも、ジュニアチームOBの一人は、大学で環境・防災を専攻しており、本実践活動が大学生としてのフィールドワークが重なる部分が多く、活動の主たる担い手として期待できる共に、若い世代による次世代の育成拡大ができる。今後、人材を増やし、より多くの住民の知見を集約していく。

PR (特徴・工夫・努力した点など)

(1) すべての活動において、教える側も学ぶ側も防災学習を楽しく学ぶという「楽習」を基本コンセプトとしており、以下の特徴がある。

①コンテンツとカリキュラムの継続的な更新・展開

ジュニアチームの月例会をコンテンツ化することで、学習者は年間を通じてその活動カリキュラムを参考にできる。また、毎年カリキュラムが更新・進化するため、コンテンツが充実している。更に、活動そのものの検証材料にもなる。

②地域防災力の向上と次世代の確実な育成

ジュニアチームが防災活動の模範を示すことで、自立性が高めることができる。また、保護者や地域の大人が本ホームページを閲覧し、参加者の増加を促すことができる。

(2) 実践活動とITの活用

学校、自治会、行政が連携し継続していく中心に、ジュニアチームの活動とIT活用がある。

即ち、ジュニアチームが自分たちの活動をインターネットのコンテンツとして更新していく中で、肖像権や著先権に配慮するなど、情報リテラシーの育成ができるとともに、集団で協議しながらコンテンツを創ることができる。

(3) 市民が学びを開発

「神戸発 わが家の防災学習」の実践活動を通じて、地域人材を発掘・育成できた。即ち、講座の一つである「森と防災」を担当した講師は、森林業関係団体の退職者であるが、その経験を活かして新たな防災教育カリキュラムが生まれた。例えば、森の植林が河川の氾らんを防ぐことを教えたり、干ばつ材を加工して救急救助の防災資機材とする「震災こん棒」を作成するなど、「座学」だけでなく「ものづくり」の楽しさを学ぶカリキュラムを新たに創りだした。この講師は今では、本実践の重要な指導者に成長しただけでなく、市民講師として他の地域活動にも招聘されている。また、上述したジュニアチームのOBは、今後地域の防災力向上のためにリーダーシップを執ることが期待されるなど、次世代を育成する場を創出することができた。

備考 (実践の参考となる公開中のHPアドレス、写真、資料等)

神戸発 わが家の防災学習

<http://toyama.shiminjuku.com/home/koubebousai/mokuji.html>

神戸と学ぶ防災市民塾

<https://toyama.shiminjuku.com/home/index.html>